JAグループ神奈川TAC・担い手担当者パワーアップ大会

優良事例発表３人を表彰

農産総合課は、県内のTAC・担い手訪問活動の優良事例や課題を共有し、相互研鑽を図ろうと２月27日、「JAグループ神奈川TAC・担い手担当者パワーアップ大会」を厚木市内で開催した。

新型コロナウイルス感染防止対策を徹底し、４年ぶりに実開催がかなった。会場にはJA職員、連合会職員など、88人が一堂に会した。

発表には県内JAより選ばれたTAC・担い手担当者８人が登壇。それぞれ訪問活動によって気付いた課題、解決策を模索する過程、その成果を力強く発表した。

「TACの訪問活動に取り組む姿勢」や「担い手の課題に沿った提案内容」、「地域生産振興への反映」などを厳正に審査した結果、JAさがみ・森海人氏、JAあつぎ・小野沢和也氏、JAセレサ川崎・坂本毅氏の３人が最高賞であるTAC表彰に輝いた。

審査を務めたJA神奈川県中央会の青木哲也農業くらし対策部長は、「いずれの発表も生産者の対話の中から課題を的確にとらえ、関係組織・部署と連携して克服するものであった。今後も発表者の皆さまには自信と誇りをもって、引き続き地域での提案を続け、各JAのTAC活動を盛り上げてほしい」と講評。大川良一運営委員会会長は「TACの日々の活動による担い手に寄り添った提案と行動力がJAグループ神奈川３か年計画の実現において重要。力を結集して、JAの総合力を発揮し、昨今の農業・JAを取り巻く困難な状況を克服していこう。」と呼びかけた。

（前列左から）中央会・青木哲也部長、平本光男副会長、大川良一会長、あつぎ・小野沢和也氏、さがみ・森海人氏、セレサ川崎・坂本毅氏、根本芳明県本部長、細野典之副本部長
（後列左から）よこすか葉山・青木梨紗氏、はだの・髙橋大樹氏、かながわ西湘・石井昭考氏、横浜・柳孝志氏、湘南・秋山洋一氏

発表要旨

ＪＡさがみ・森海人氏	ＪＡあつぎ・小野沢和也氏	ＪＡセレサ川崎・坂本毅氏
堆肥施用による津久井在来大豆の収量と品質向上にむけて～６次産業化への新たな取り組み～	新規就農者との関係構築と部会活動への参画	菅ののらぼう菜普及活動について
平成25年に市内の豆腐店と生産者による地産地消の取り組みで設立された座間市大豆生産組合では、ここ数年地力低下による平均収量の減少が指摘されており、TAC訪問時に化成肥料に依存した栽培が行われていることが判明した。 しかし、同組合の組合員は多品目を栽培していること、地力向上に必須な家畜糞堆肥中心の施肥設計では施用量が多く、労力がかかるデメリットがあった。そこで栽培試験を行い、家畜糞堆肥・緑肥・化成肥料を組み合わせた施肥管理を情報媒体「座間センター通信」にて提案したところ、家畜糞堆肥の取扱量が前年度より大きく増加した。また、販売面では豆腐店で敬遠されがちな小粒大豆の加工品を全農・関係機関と連携し開発・販売。組合員からは大豆栽培の意欲が向上したとの評価を受けた。	厚木市都市農業支援センターが平成26年に設立されて以来、新規就農者が増加している。TACとしても農地確保を目的としたマッチングに取り組んでおり、遊休農地・耕作放棄地は減少してきた。一方で、厚木市の新規就農者は同JAの農業塾・かながわ農業アカデミーの同期生のつながりや、厚木市外在住であることも多く地域の知り合いが少ないため、新規就農者同士でしか情報共有できない状況にあった。 荻野地区は他地区に比べ管内で就農している新規就農者が多く、営農指導員の立場から青壮年部、荻野直売所協議会など、部会活動への参加を積極的に呼びかけており一定の効果を上げている。 今後も部会活動そのものの維持のためでなく、新規就農者の所得向上・経営の安定を前提とした経営や地域交流の手伝いとして呼びかけを進めていきたい。	菅地区の伝統野菜である「菅ののらぼう菜」とその派生品種「かわさきつや菜®」は、2～4月に旬を迎えるアブラナ科の一種である。管内では軒先販売で人気はあるが、川崎市内では認知度が不足しており、同支部部員から生産拡大を希望する声も挙がっていたことからPR・普及活動に取り組んだ。保存がきき通年で日常的に食べられることから乾麺への加工に思い至り、作付けから収穫、加工、販売、PR方策まで、部員・製造会社・JAで一体感を持った協議を進めてきた。 地元中学校の美術部にパッケージデザインを制作してもらい、商品化が実現。農業まつりやセレサモスでの販売は好評を博した。 本事業を通して、伝統野菜の生産維持・普及による菅地区の地域活性化につながった。

柑橘の安定経営に向け研修会

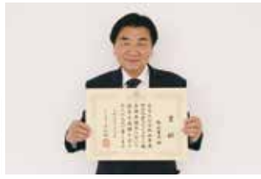
優良園の表彰も

農産総合課は３月６日、「令和４年度柑橘優良園・キウイフルーツ園管理共進会褒賞授与式並びに柑橘安定経営研修会」をJAかながわ西湘本店で開催した。生産者、JA職員、関係機関など55人が参加した。

神奈川県の令和4年産温州みかん生産量は14,800トンで昨年を上回る見込み。今年は台風の影響もなく生産量は安定していたが、中晩柑類の湘南ゴールドは寒波等の影響によりス上がりの症状もみられた。県内の柑橘生産者は高齢化を背景に減少しており、そうした状況にありながらも安定経営に向けた情報交換の機会として本研修会は開催されている。

研修会ではかながわ鳥獣被害対策支援センターの島田駿氏が「果樹の鳥獣害対策について」の基調講演、県農業技術センター足柄地区事務所が「ウンシュウミカンの病害虫防除について」「ヒリュウ中間台を利用した‘大津四号’の観光もぎ取り園等を対象とした摘果技術」の情報提供を行った。

また、同日は令和４年度柑橘優良園・キウイフルーツ園管理共進会褒賞授与式、園芸功労者表彰伝達式も実施。キウイフルーツ園管理共進会では飯山富夫さん（JAかながわ西湘）が神奈川県知事賞を、柑橘優良園共進会では小嶋吉治さん（JAかながわ西湘）が日本園芸農業協同組合連合会会長賞を受賞。令和4年度園芸功労賞（柑橘部門）は榎本昌之さん（JAかながわ西湘）が受賞した。



県知事賞を受賞した飯山富夫さん

産学連携　９か月間のプロジェクトを完走

伴走者と育んだ「産地への共感」

昭和女子大学との産学連携プロジェクト「JA☆ベジラボ」の最終授業が2月8日、都内で行われた。

本プロジェクトは三浦市農協、JAよこすか葉山、玉川高島屋S・C、JA全農かながわ農産販売課と同大学が産学連携して取り組んでいる。栄養士や管理栄養士を目指す学生が野菜や農業の知識を深めながらレシピを考案し、三浦半島産野菜のプロモーションおよび消費拡大喚起を目指すものだ。

約半年間をかけ18人の学生が産地情勢の勉強や店舗との意見交換、試作を重ね、レシピの考案・改良に取り組んだ。12月にプレゼンテーションされた36作のうち、４作のレシピが採用。１月下旬に玉川高島屋S・C「フーズシティ」にて販売した。

参加した同大学若松歩実さんは「授業で関わるうちにまるで生産・販売する側に立ったような気持ちになれた。三浦半島産野菜ファンのお客さまもいて、うれしい気持ちになった」と半年間の変化を話した。

キユーピー「旬の味をまるごとたのしもう」

関東圏のイオンで昨年と同様4月8日・9日の2日間、三浦半島産春キャベツの販促企画を実施する。キユーピー株式会社とタイアップし、タブロイド紙による春キャベツの部位別レシピの紹介や、購入者への「ごま油&ガーリックドレッシング」試供品のプレゼントを行う。本企画を通し、消費者へ旬の味覚を食べ方と併せてアピールするねらい。

〈実施概要〉
●対象品目：三浦半島産春キャベツ（三浦市農協・JAよこすか葉山）
●実施日・実施企業：４月８日（土）、９日（日）
　⇒イオン12店舗（板橋、南砂、葛西、有明、東雲、品川、碑文谷、日の出、村山、東久留米、多摩平、練馬）
●実施内容：①タブロイド紙による春キャベツのレシピ紹介。　②春キャベツ購入者にドレッシング試供品をプレゼント。